

# 愛知の博物館

1980年 No.26



愛知県博物館協会

表紙写真 黒褐釉三層口縁壺

高さ37cm 胴径25cm

クメール 12世紀

ヨコタ南方民族美術館蔵

## 目 次

地域博物館とその連携 柴垣勇夫	1
名古屋市博物館における展観事業 西田躬穂	3
ヨーロッパの博物館 金子功	7
施設紹介一 豊橋市美術博物館 (昭和54年度から協会加盟)	11
ナイロビにて 加納良雄	14
フローラ雑記 磯野英男	16

# 地域博物館とその連携

柴 垣 勇 夫

## 1. はじめに

ここ数年、いわゆる歴史民俗資料館や、人文系博物館等、新設の博物館施設が県内各地に開館され、それぞれ、特色ある教育・文化施設として活発な活動を開始している。昭和54年度に限っても、愛知県陶磁資料館本館・豊橋市美術博物館・蒲郡市郷土資料館・名古屋市見晴台考古資料館等の公立施設が開館され、相ついで開館特別展示が開催されたことは、愛知県の博物館組織の充実といったことから歓迎すべきことであり、これらの施設が地域社会における文化の振興と生涯教育のための機能を果す施設としての役割をもつことは言をまたない。

一方に、こうした人文系博物館施設の増加に対して危惧の意見もないわけではない。既設館の充実や、計画的な文化施設の配備を実現することこそ文化行政のあるべき姿だとする意見や、収集資料が少ないにもかかわらずある種の専門施設ということから展示施設の大きなものを先行させることへの行政的批判もあるようである。しかし、地域社会の要請のもとに、建築家、専門研究者等の要望を集約した形で、それが地域の特性をもって建設されており、これらが現状からみて必ずしも多すぎるということはない。文化財の散佚を防ぎ、生活様式の変化を記録・資料収集するための施設建設は、現代社会の変貌の激しさに比べれば、むしろ遅々たる動きといえよう。特に、最近、自然科学系資料の散佚を憂え、自然科学系博物館の必要が叫ばれていることもまた、博物館施設が、地域社会の変貌を直接とらえ、地域の歴史的な特色を生かした専門的な施設として活動することを示唆していると思われる。

一昨年南館が、引続き昨年本館が開館したわが愛知県陶磁資料館のこの1年余の展示活動に対する利用者の動向から、陶磁器専門施設が地域に即した博物館施設としての方向を模索している現実を述べ、地域博物館相互の連携の方向を考えてみたい。

## 2. 愛知県陶磁資料館の利用者

当館は、承知の如く交通機関の未整備な地域にある施設のため、休日を除き自家用車等による来館が主体となる施設であるが、「昭和53年度の入館者実態について」（愛知県陶磁資料館事業概要—昭和54・3刊）によれば、9ヶ月（昭和53.7～54.3）に約3万人の利用があり、昭和53年11月の1週間の利用者400人にアンケートを実施したところ、38%弱が名古屋市内在住者で、17%が地元瀬戸市内、他に尾張部14%、西三河12%、県外15%という比率であった。特に県外利用者は、東京・京阪神が多く、本館の来館者の一つの特徴を示している。この特徴は、当初アンケート実施期の企画展示のPRと大きな関係をもっていると考えられたが、54年度におこなっているアンケートでは、県外來館者がさらに22%を越す状況を呈し、当館の広域文化施設としての役割の重大さを痛感させてくれたのである。

一方、団体利用状況は、別表の如く（221団体約1万人）、名古屋・尾張・三河の3地区で各々30%前後と割に平均しており、県外からの団体も



愛知県陶磁資料館・本館

約10%を占めていた。これらの内訳は主としてPTA・婦人会・学生・教師等の教育団体が60%を占め、県外からは主として文化団体・同好団体が利用している。特に県外では関西方面からの利用が数団体あり、先の地域別利用者に類似した面がみられた。しかし利用団体の中では学校教育における利用が極めてわずかであり、53年度利用者総数の4%にすぎず、いわゆる博物館施設の観覧者の3つのグループ（子供・一般成人・愛好家・専門研究者等）のうちの子供グループ（児童・生徒）をいかに把握し、利用者としてどう位置づけるかが展示内容を含めて館の主要な問題である。なお54年度後半の本館開館特別展から常設展に切り換えた時点から現在までの時間は2ヶ月弱と少なく、利用者分析にまで至っていない。しかし、団体利用状況から判断すると、本館開館という施設の充実から入館者数は増加しており、傾向としては53年度の状況とさほど変わらない。なお、来館者から関連諸施設の問合わせを受けることもしばしばである。

こうした現況を踏まえる時、最大の問題点は、常設・企画展をとおして地域社会といかに結びつくかということである。博物館施設職員として、予算の足りない現実の中で、陶磁器に関する歴史を如何に理解しやすい展示とするか、地域の児童・生徒を含めた一般成人を館へ引きつける魅力は如何にすれば生まれるか等、展示換えの回数を追うごとに真剣に考えるわけである。

（別表） 団体利用状況一覧表（自53.7 至54.1）

地域別団体数				種類別団体数								
尾張	三河	名古屋	県外	PTA	婦人会	教員・学生・生徒	老人会	文化団体	役所	観光団・同好団体	その他	
60	61	79	21	54	19	26	21	15	14	32	40	
27.2%	27.6%	35.7%	9.5%	24.4%	8.6%	11.8%	9.5%	6.8%	6.3%	14.5%	18.1%	

### 3. 地域博物館の相互の連携

以上みたように当館には、広域的な専門施設としての側面が強く、他県からの来館者が多いという特徴がある反面、小地域社会の中での位置づけを模索している段階であるが、地域に根ざした博物館活動の実践を通してその特色を明確にしようとしている。

前述のように地域変貌に伴い、県内各地に博物館施設が数多く建設されていることは、やがて歴史的な所産による地域的特色のある人文系諸分野、自然科学的諸分野等の、専門的に細分化された諸施設の出現を助長する。個々の施設は、人的・経済的制約を受けつつも、その特性を生かした展示・普及活動を行い、利用層の拡大に真剣に取組むこととなろうし、また専門性をより平易に、判りやすい展示へと進めていくであろう。そうした実践例が、関連性ある諸施設の連絡組織の中で、経験的に積みあげられていった時、それぞれ個々に活動していた諸施設の模索は、かなり明瞭な問題意識と、具体的な対応策へと進展していくのではなかろうか。

地域博物館の専門性に応じた関連諸施設の展示活動、普及活動、研究活動を互いに情報交換し、地理的に結びつく諸施設の連携、相互協力によって一館で展示できない部門を補填しあい、個々の特色をもつて総合として地域史の変遷展示を系統化できた時、博物館施設の、社会教育機関として、地域社会に果す役割は、一層大きなものとなろう。

### 4. むすび

愛知県博物館協会加盟館が、年を追って拡大する今日、大規模な、情報センター的役割を荷なう総合博物館を核として、それぞれの専門的な地域博物館の連絡組織をめざすことは、人文系、自然科学系の施設数の差、施設内容のちがい等々から、時期尚早論もあるが、協会として徐々

に手がけていく必要があるのではなかろうか。

〈愛知県陶磁資料館 主任学芸員〉

## 名古屋市博物館における展観事業

西 田 肇 穂

### 1. はじめに

昨年末、岐阜県の内藤記念くすり博物館において、愛知・岐阜・三重三県の博物館交流研究会が開催され、その際、当館の展観事業の概要の報告とその若干の課題等を指摘する機会が与えられた。ここでは、その報告の要旨に質疑内容を補って記し、名古屋市博物館の展観事業について紹介したいと思う。

当館は、昭和52年10月、約10カ年の準備期間を経て開設した、名古屋を中心として尾張地方の歴史・考古・民俗及び美術工芸資料の収集・保存・調査・研究ならびに展示を行う歴史系博物館である。1年後には常設展が開設し現在まで約2年間半、展観事業をはじめとした諸事業を行ってきた。総工費45億円余、常設展示工事費3億3千円余、延面積1万8千m<sup>2</sup>余、ギャラリーを併設、常勤職員39名、人件費を除く年間運営費3億5千円余、(昭和54年度)の、地方公共団体の設立する博物館としては、最大級の規模をもっている。

### 2. 展観事業の概要

当館の展観事業は、常設展・部門展・特別展(新聞社との共催展を含む)に大きくわけられる。54年度予算は約4千4百万円である。以下個別に概要を記そう。

〈常設展〉 当地方の歴史を原始より現代までを10のテーマにわけ時代を追って展示を構成している。展示場面積1800m<sup>2</sup>、総展示資料点数864点(内実物資料366点、複製87点)、模型・ジオラマ・スライドを随所に用い、さらに展示資料を理解する上での補助として、写真・図表パネルをほぼ全壁面に配している。実物資料については1カ月~1カ年の間隔で展示替をおこない、また、テーマ3・4・5・7には、各時代の「文化」のコーナーをもうけ2週間~2カ月程度の間隔で、テーマを設定して展示替をしている。ここでは1カ年でほぼ160点の資料を展示替した。場内には、観覧者の軽易な質問等に応ずるために常時5~6名の会場係員が配置されている。観覧者は、1年



(常設展) 鉄地蔵の複製の展示



(常設展)  
ケース内実物展示と写真パネル

間で15万人余、うち小・中学生の学校の教育課程としての利用が約6%であった。解説書として、一般向展示概要「歴史への招待」、小学生向解説書「私たちの郷土」を発行、現在は、各テーマ別の詳細な展示解説書を作成中である。

＜部門展＞ 当初は、常設展が時代を追った展示構成をとっているため、各分野や時代また分類別の掘り下げた展示ができないという欠陥を補完するために考え出された分野である。観覧料金体系は、常設展と併せて設定され、動線も常設展示室から導かれている。現在までに実施した段階では、常設展の関連を云々するよりは小企画特別展といった色彩が強い。開館以降、「近世生活文化史 芝居」「からくり一人形と文化」「愛知の新出土品展」「名古屋と明治維新一徳川慶勝とその周辺」「食の道具一臼」「城下町の文化一名古屋のやきもの」の6本の企画展を実施した。いずれも館蔵品の占める比率は低い。また、収蔵品展や新収資料紹介の展示会もこの部門展の範囲に含め、3回実施した。

＜特別展＞ 実施運営形態により4つの型に分類される。館の独自企画（新聞社の名儀共催も含む）（A型）、他博物館と共同で企画した場合（B型）、企画・運営ともに新聞社等との共同実施の場合（C型）、新聞社等のもちこみによる共催展（D型）である。（図表参照） 特別展示室・部門展示室の二室を使用し約1000m<sup>2</sup>である。A型のものを年間2本実施しており、学芸員の最も労力を要するところである。近年、兵庫県下の博物館などで例があるが、B型は、地域博物館が大きな展示会をする場合の一方法である。さらに当館の場合は、D型が年間2～3本実施されていることが、一つの特徴である。これは現在までは、国立博物館でよく実施されており、名古屋市博物館が、「東京・京都で開催される“国際的展示会”を名古屋に途中下車させる」といった任を負っていることを示している。ただ、館の展示事業の関連から考えると、独自企画との仕事量のかねあいや歴史系博物館としての独自性の保持といった観点などからいくつかの問題点を指摘できる。

＜その他＞ 國際児童年の協賛事業として実施した「中学生のみた名古屋展」、また資料學習室で55年春開設予定で準備している民俗資料を中心とした展示「くらしと米つくり」がある。

### 3. 課題など

今まで2カ年半程の短期間の展示経験であるが、私自身の考える、当館の展観事業について考えるべきことをいくつかあげてみたい。

第1は、展観事業の実施形態の検討と独自企画展を重要視するという課題がある。表をみれば明白なように、ピッシリ埋められた展観を実施するためには、開設以降学芸課内が他事業の整備を相俟って、期日の限られた展示に追いまわされるという状態が続いた。例えば、特別展・部門展・共催展・常設展にほぼ1～2名の担当者がかかわっていくのには、年間1人が重複して展示を実施することになり、とくに館の独自企画になれば実施半年前からほぼそれのみに没頭することになる。企画をあたため練る期間がなく、各自がこれまでの手もち企画で放出するという状態であった。展示担当者により差はあるものの、企画を練る時期1年間、実施準備に1年間の最低2年間が1つの企画について保障される必要があると思う。展示はその博物館の蓄積したものの表現であり、現在に、57・8年実施展観事業への展望をもちたいと考えている。

第2は、展示の内容の良さを保障するものは何か、また展示の良さとは何なのかといった、展示の理念について、館内で考える時期であると思う。「あの展示はよかった」「評判の良い展示だ」ということばが展示を見たあとよく口にされる。いわゆる「博物館通」の人、全くの観光のための観覧者、目的をもって観覧する人等々その立場によって意味する内容も異なるが、いくつか抽出できる事項がある。1つには、展示資料の“良さ”で、それには、いわゆる“目玉”的な資料があることを意味する場合もあるし、未知の資料の発掘の場合もある。2つには、企画性

の指摘である。当館は、53・4年の2年にわたって「尾張の国宝・重要文化財展」を実施した。展示資料としては一級品が揃った展示であり、その点では評価された。が、尾張にある指定物件を集めただけでは企画性に乏しいと指摘する人がいた。傾聴すべき意見であると思う。3つには、わかりやすさを指摘できる。その道の専門家でないと判りにくい展示ではなく、陳腐ではあるが、「親切な」展示が「良い」展示とされる場合は多い。「親切」の内容には、展示方法、資料解説、展示意図解説等の内容が含まれる。「もの」は無限のことを語るから、解説は全く不要か最低限でよい、という意見と、できるだけ多くの情報を「もの」の補助として提供すべきだという全く正反対の意見が時々かわされるが、多様な観覧者の層に応ずるために、的確な補助情報の提供が必要不可欠であると思う。以上3つほど例としてあげてみたが、こうした内容について具体的な展示を前にして、学芸員全体が検討しあう機会をもつことが必要とされている。あわせて、現在のところ未実施であるが、観覧者の系統的な意見聴取が課題とされている。

第3には展示技術の検討である。机上では把握できないことも多く実験=展示の実施によって積み重ねる必要がある。常設展を一巡して「この展示物は疲れる」と指摘した人がいた。床材や通路の長さもあるが、もう1つに、展示物とバックのパネルとの関係があるのでないか、ということに近頃気付いた。常設展の場合、ケース内は資料が配置され、壁面は写真、文字が一面に配されている。できるだけ多くの情報をという担当者の意識のあらわれであるが、このバックのカラー写真と実物とのダブリが観覧者に疲労感を与えていたということを改めて認識した。これは1つの事例であるが、このほかにも照度、ものの高さ、色彩等加えるべき検討課題が多い。

以上、思いついたことを書き連ねたような形となったが、こうした課題をやりとげるために、1つの展示終了毎にいくつかの成果や欠点をまとめ共通の博物館の共有財産とすることと、展示をすすめる上で館の衆知を集める機会の設定という2つのことが、運営面では必要であると考えている。

(なお、名古屋市博物館の概要については「博物館研究 Vol 14-4」に詳しく紹介されているので参照されたい)

＜名古屋市博物館 学芸員＞

## 名古屋市博物館開館以降展観事業一覧表

名古屋市博物館展観事業のタイプ

A：独自企画  
B：他博物館との共同主催

C：新聞社・他博物館との共催・実行委員会方式  
 D：新聞社等のまちまわり展（市博・名儀共催）

# ヨーロッパの博物館

金子功

昨年11月ギリシア、エジプト、イタリーの旅の途中立寄って見た博物館のうちで、あまり日本に紹介されていない2～3館を紹介して見た。

## クレータ島

ギリシアはクレータ島とアテネに立寄ったのみであり、クレータ島はギリシア文化のルーツとも云われクレタ文明又はミノア文明なしにはギリシア文化のみならずヨーロッパ文化の源である。クレータ島の最大の街イラクリオンには立派な考古学博物館がありクレータ島の出土品はほとんど集められているし、近郊のクノッソスにあるクノッソス宮殿の遺跡等見るべきものが多いが此等はすでに日本にも度々紹介されているので割愛しよう。

## アテネ

ギリシアの首都アテネは人口300万人、というよりギリシアの全人口の30%が住んでいる大都会である。アクロポリスの丘が有名であるが、パルテノーン神殿は今修理工事中のため完全な形になっていない。この丘にはアクロポリス博物館があり、他にアテネ市内には国立考古学博物館、アゴラ博物館等があるが今回は考古・歴史関係はすべて又の機会に譲りたい。ただアクロポリスが神聖な丘であり権力のシンボルの意味があるが、此の丘の北側のアゴラの遺跡はギリシア語の市場のある広場を意味するが政治・裁判・信仰・演劇等の施設のある市民の社交場の意味もある所だけに古代の石骨通のわだちの跡や、水車跡、博物館の中にある当時の市民の生活用品等、人臭さ充分の楽しい所である。

## ピレウス海博物館

アテネの中心に近いオモニア広場から地下鉄で30分程の所にピレウスという港町がある。ここに海洋博物館がある事は知っていたが詳しい事は不明であった。たまたま出発前に日本博物館協会から貰ったリストの中に Pireas Maritime tel 451-6822 とあったので安心して出掛けた。駅を出て聞いて見ても判らない。親切な人が日本語の少し判る船員屋を教えてくれたのでその船員屋が電話して貰った所出たのは博物館ではない。電話帳を散々繰って見ても判らない。海洋博物館だから港の近くだろうと一番大きいカントロス湾の波止場の附近、パサリスニのゼアの港、トルユリマノのムニキア港など探し廻ったが、英語がほとんど通じないので結局見付からなかった。余談になるがムニキア港あたりの大衆食堂の魚料理は新鮮で安く結局一日かかって魚料理を食べに行った事になりアテネに引返した。

夕方シンタグマ広場の脇にあるギリシア観光局（NTOと呼ばれているがギリシア国立銀行の中にある）で詳しい地図を貰って日本語の上手な女人に大体の位置を聞いておいて翌日再びピレウスに出掛けた。

ゼア港の外側と云う大体の位置は判ったので、大体の見当をつけて行って見た。

B C 500年位の頃テシストクレースという大政治家の手に依って建造されたアテネーピレウス間の大城壁の通っていた海岸も今は城壁を取壊して広い道路と緑地になっているが、博物館らしい建物は無い。近くの事務室に行って尋ねると、

## 「道路の下」

と教えてくれる。見付からないのも当然、城壁跡の道路の下が博物館になっている。

海岸を埋立てた広場を囲んで全長 200 m 位もあるうか、巾 7 m 位の部屋が大きくカーブして設けられている。

部屋数は 6 部屋ほどか一番最初の部屋には B C 500 年ペルシアとの戦（サラミス海戦）のパネル、三段櫓の戦船、の歴史から始まって古代から中世の帆船の大きいものは 3 m 程のものから船具、大砲、軍服等豊富な展示物でなかなか楽しい博物館である。

前の広場には大砲、水雷発射機、実雷発射管砲塔、燈台等数多くの実物が屋外展示されている。

私の見学中に中学生らしい学校の団体が入って来て水兵服を着た青年がなかなか流暢に（と云っても私には判らないギリシア語であるが）説明している。

事務室を訪ねて図録を尋ねたが一切用意されていないようで、代表的な展示物の絵葉書だけを貰って帰った。

此の博物館の住所は

Marine Museum (NAVAL MUSEUM)

Akti Themistokleous Pireas Greece

Tel 45-16262

アテネには考古、歴史関係は前に述べた通りであるが、工芸、美術等に関心のある方は市内中心部国民公園の東北にあるベナキ博物館 (Benaki Museum) には民族衣装のコレクションが豊富である。アゴラの東北プラカ地区に近い所にあるギリシア民芸博物館も一見の価値のある博物館である。

ほかにビザンチン博物館・歴史民俗博物館・戦事博物館等がある。いずれも前記 N T O で地図を貰えば所在はすぐ判るので参考までに記しておく。

## カイロ

カイロにも沢山の博物館がある。有名なエジプト博物館のほかにもコプト博物館（古代キリスト教のコプト教関係）イスラム博物館（イスラム文化）エジプト文明博物館、農業、綿花博物館、軍事博物館、鉄道博物館、郵便博物館等地図上で調べたのみでも 15 館ほどあるが滞在日数が少ないので農業博物館、イスラム博物館、コプト博物館の 3 館を見ることにした。

タクシーに行先を告げるにせよ、街の人々を尋ねるにせよ英語が通じないとお手上げになるので手帳の左側に英文で書いておきホテルのフロントで右側にアラビア文字で書いて貰って街に出た此の方法は効果があり迷うことなく歩き廻ることが出来た。

参考までにその一例を御紹介します。博物と云うアラビア文字だけは判りましょう。

農業、綿博物館は講談社版世界の博物館のエジプト博物館の中にあるカイロ市街地図の中でも現地で貰ったカイロ地図の中でもゲシラ島という丁度大阪の中之島のようにナイル川が二つに分れた。綿博物館と書いてありその隣がエジプト文

明博物館となっているが現在此の附近一帯は見本  
市会場になって綿博物館は少し離れた所の農業博物館に移っていた。文明博物館はそのままらしい。

尋ねあてた農業博物館は 500 m もあるかと思われる広い敷地の中に何棟かの建物が建っている。勝手が判らないので正門から入らず横の通用門から入ったらしいが入館料を払ってガイドブックを貰う。

COTTON MUSEUM —— نيل و مصانع  
AGRICULTURAL MUSEUM —— زراعي  
THE MUSEUM OF  
(ISLAMIC ART)  
ISLAMIC MUSEUM ) —— اسلامي  
COPTIC MUSEUM —— كoptic

入口に近い建物は農業民俗館とでも云うべき建物で古い農具その他豊富な資料が展示と云う上りケースに納められている。写真撮影もOKでユックリ見学出来た。

隣りの建物はガイドブックに依ると動物館と名付けてあるが工事中で閉鎖されていて見る事が出来なかった。2階建の立派な建物である。次の建物は小麦等食料、衣料関係が展示されているが驚いた事には案内人と称するウスギタナイ男がカギを持っていてチップを出さないと開いてくれない。はじめは判らなかったので入口でボンヤリしていると「今日は休みだ」と云うような身振をする。片手にカギ束をチャラチャラさせながら居るので気がついてチップを渡すと開いてくれる。これは翌日訪れたイスラム博物館・コプト博物館も同様で案内人にチップを渡さないと部屋の扉を開いてくれないし電灯もつけてくれないイスラム博物館のごときは途中で案内人が次次と変るのでその度にチップを渡していると入館料に近いチップが必要になる。正規の職員では無いらしいがこんな男を自由に入れておく所あたり途上国の感が強い。

さて館内に入って見ると標本、模型、実物大人形等、資料の点から見るとなかなか豊富で楽しい展示室である。ただ残念な事にはアラビア文字が読めないので詳しい説明が不明の点である二階建の此の建物は展示室20室で一階は農業機械、米、綿等で二階は砂糖、アルコール、タバコ等が手際良く展示されているが何としても館内が暗い。全体照明が不足している上に個々のケースに照明が無いのでまことに見難い。

半分程見終った所で案内人が時計を示してもう時間だという。何をいうかまだ1時間もあるでは無いかと時計の文字盤をたたいて交渉するが仲々承知しない、そのうちチップだと気がついて小銭を渡すと気嫌をなおして又歩き出す、隣にアラブのパビリオンがあるが開いてやろうか等と云い出す、まさにカイロの博物館の沙汰は金次第と云う始末。

次の日は幸にホテルの前で英語の話せるタクシーを見付けて一日契約で有名なモスク（回教の寺院、コプト博物館、イスラム博物館及び古くからあるナイル河の水量を計るためのナイロメーター等を見て廻ることにする。カイロの街はバスも沢山走っているがすべてアラビア文字の為行先が判らず外国の利用はまず難しい。上にタクシーも仲々走って来ない上に案外法外な値段を要求されるのではじめに交渉して料金をきめて時間でチャーターすることの方が便利で安い。

### コプト博物館の写真屋

コプト博物館は前に述べた古代キリスト教の博物館で隣に立派な教会と遺跡もある。主な展示物は教会にあった石の彫刻、フレスコ画、コプト織、灯火器具等小さいながら見るべきものが多い。面白いことに写真はいらないかとしきりに誘いかける男がいるので、跡について行くと彼の仕事場に案内してくれる。部屋には旧式な引伸機等雑然とした暗室があり自分の手で引伸した写真やスライド等売っている。上手な写真とは云えないが、このあたりも近代国家の博物館とは変わっている。

### イスラム博物館

イスラム芸術といえばガラスもその代表の一つであるが美事なガラス細工のランプ（シャンデリア）等は現代建築の中に組込まれても不釣合でない細工である。

家具等も数多く集められているが、私にとって特に面白かったのはアストロラーベ（古い天体観測器具）砂時計、天文台、の図版等も多く集められていて、アラブの科学的一面を知らされた。

### モスク

カイロはモスクの街とも云われているが、たしかに小高い所に登って見るとどちらを向いてシャッターを切っても4~5のモスクが写り込んでいる。中でも一番立派なのはモハメットアリモ

スクとアズハルモスクである。

モハメットアリモスクは救い城（現在は兵営になっている）の一画にあり建物そのものが立派である。モスクは内部に入るためには必ず裸足にならなければならない習慣になっているので外国人観光客のためには靴カバーを貸してくれる。広い中庭の中に深い井戸があって大声を出すと数秒たった頃にエコーが返って来る。丘の上の寺院だから相当深く掘ってあるのだろう。

建物の見事なモハメッドアリモスクと対称的に有名なのはアスハルモスクである。建物自体はそれ程立派とはいえないが、内部は各地の神殿から集めたと云われる柱が使用され、見事なガラス細工のランプが沢山吊されている下で回教徒の習慣である一日五回のお祈りをする人や、黒板を立てて教室になっている所もある。此の寺院は970年に建造されてから988年にはときのイスラム教最高指導に依ってイスラム大学として宣言されており、コーラン等の解説等イスラム教の知的中心で教徒達にとっては知的メッカとも云われており隣にアズハル大学もある。

エジプト国内だけでも4200万人の人口のうち70%がイスラム教徒といわれる中の中心である。

チップと砂ボコリの異様な社会のカイロ滞在も3日間位では充分知るという訳にはいかないが、それでも観光客の行かない庶民の町並に入ると、道端で将棋をさしている若者達が、座ってお茶でもどうだとコーヒーを運んで来る等そこには観光客にまつわりつく嫌らしさは少しも見られない所もあり、今となってはもう一度行ってみたい気持が強い。

### エウル（ローマ）の博物館

イタリーの旅はフィレンツェを中心としたトスカーナ地方の中世の姿の残っている都市を廻る事とアルバニア山脈の麓の町レオナルドダビンチの生家のあるビンチ（VINCI）を訪ねる事が目的で、これは楽しい旅であり、多年の念願がかなった思いであったが、これは又機会があれば紹介することにして今回はローマの南郊エウルにある博物館を紹介しよう。

E.U.R.（エウル）というのは第二次大戦の前にムッソリーニの計画に依ってローマ万国博覧会の計画があり、ローマ南郊に広大な敷地が用意されたが、開戦となって結局万博は開催されなかった。戦後イタリー政府は此の土地を使用して新らしい都市作りを計画して官公庁、会社の本社等をここに移した、全敷地の一の面積しか建物を造らせないと云う。當時としては随分思い切った構想であったが今は自動車の増加の為駐車場難となり、緑地の中にまで車が入っている状態である。ちなみにU.E.R.という名前はローマ万博すなわち

I'Esposizione Universale di Roma  
の略である。

このエウルにいくつかの博物館がある。

### ◎ローマ文明館（MUSEO DELLE CIVILATÀ ROMANO）

地下鉄でローマ市内終着駅（テルシン）で8番で降りるとここの中でもエウルの中心大通を見るとオベリスクのようなもののが建っているのがマルコニ広場がありこれを右手に折れると両側に建物がありかつては左側（北側）が民俗博物館で右側が科学博物館であったと思うが今は北側の建物は閉鎖されていて右側の建物は民俗、考古博物館になっている。そしてその二つの建物の間をずっと東に進むとローマ文明館がある。通りをはさんで両側の建物は随分大きいもので中に入ると大きな古代ローマの模型が造られておりローマの大観が理解されたら内部の各部屋を見るようになっている。数年前はじめて訪ねたときには集められた数多い遺跡の建物の一部や発掘品の多さに驚いて、さすがにローマだ、集めればあるものだ等と感心して見て歩くうちふと一つの展示品に手をふると音が変だ。たたいて見ると石こう細工である事が判った。聞いて見ると全館レプリカばかりである。

実物資料（一次資料）かレプリカ（二次資料）かとは以前から博物館界で論ぜられていることがあるが、これ程巨大な博物館が全部レプリカと云うのは珍らしい、しかしながら精巧に出来ており古代ローマを知らせる為の教育博物館としては一つの在り方であろう。

詳しいガイドブックより一見の価値のある博物館でここを見てからローマ市内の遺跡を見て歩くと興味も一段と深い。

#### ◎民俗考古博物館

前に述べたマルコニ広場に近いこの建物は3階と4階が博物館になっている。壁に大きく書かれている文字が目印になる。

MUSEO NAZIONALE PREISTORICO ETONOGRAFICO L.PIGURINI

が正しい名前のような。電話番号は5919132番、3階に昇ると左側がアメリカンディアン関係の民俗資料が広い室内（一部中二階）に美しく展示されており中学生らしい団体が教師の説明を受けながら賑かに見学していた。左側のアメリカ室に比べると右側のアフリカ館は資料数も少なくまだ充実されていないように見受けられる。

4階は考古資料でローマ近くの2～3個所の出土品で構成されている。民俗資料の3階に比べるとこの考古資料は単に資料が並べてあると云うだけでなく、模型等もふんだんに使ったりして判り易い展示がされている。地下の埋め方などが上手に作られていたり、人骨のようすなど決して大きい展示品ではないが小、中学生向と云えようか。

展示品等を作る部屋も無いのか若い男女の職（学芸員か？）が熱心に展示品に手を入れていた。

ローマ文明館にせよ、此所民俗、考古博物館にせよ、ローマに沢山ある観光客であふれている美術館とちがって学校の教育のための教育博物館としての役割は充分果しているようである。

以上走り書に何館かの博物館の紹介したが日本からの博物館を訪ねる博物館人が有名な博物館を見て廻る例の多い中で、このような中小規模の地域に密着した活動している博物館も大いに参考となる。

<東栄町御園天文科学センター 所長>

### —施設紹介—

## 豊橋市美術博物館

豊橋市美術博物館は、豊川を背にした豊橋公園内の旧吉田城址三の丸に位置しており、城郭の遺構や樹木の緑など、歴史と自然の景観に囲まれ、めぐまれた環境に建設されています。屋根の「反りのスカイライン」と外壁の「緋色タイル」が建物の特徴でモダンな中にも古格を藏しています。

この美術博物館が、人間的な情熱、関心、美的欲求などを充足させるための生きた機能を發揮し、人々の心のよりどころとして親しまれ、愛される施設となるよう努めています。



豊橋市美術博物館

一階には3つの企画展示室があり、ここでは絵画、書等美術作品の特別企画展を主催するほか、一般美術展の会場としても広くご利用していただいています。

また、二階には5つの常設展示室があり、考古資料、歴史資料、陶磁器資料などを各室ごとのテーマで常設展示するほか、随時特別なテーマに基づく特別企画展の開催を予定しています。

そのほか、当館は博物館として必要な講演会、映画会等を開催したり、解説書や図録等の出版物を刊行するなど、普及活動の充実をめざしています。

＜施設の概要＞

◆位置◆

豊橋市今橋町3番地 電話51-2621

◆構造規模◆

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造二階建

建築面積 2867.3625m<sup>2</sup>

延床面積 3669.6100m<sup>2</sup>

◆設備◆

電気設備、給排水衛生設備、空気調和設備、昇降設備（1基）

○一階

小会議室、講義室、講義準備室、第1、第2、第3企画展示室、事務室、応接室、館長室、収入室、荷解室、作業室、機械室、器具庫、収蔵庫1、ラウンジ・廊下等

○二階

常設展示室1、2、3、4、5、閲覧室、研究室、作業室、写場、暗室、収蔵庫2、3、ラウンジ・廊下等

＜収蔵資料＞

◆考古資料◆

豊橋市内及び周辺の貝塚・古墳・古窯等遺跡の出土品約2000点

◆民俗資料◆

養蚕、製糸、農耕、山樵、漁撈、生活用具約1600点

◆陶磁器資料◆

司忠氏寄贈の江戸期～明治初期の酒器等1146点

◆歴史資料◆

大河内家寄託資料をはじめ、地方文書等約20000点

◆美術資料◆

浮世絵寄託資料をはじめ、版画及び郷土作家作品等

＜開館時間＞

午前9時～午後5時

＜休館日＞

月曜日・年末年始

＜付属施設＞

民俗資料収蔵室 { 豊橋市多米町字流ノ谷34番地の1の1 }  
開館日～毎週日曜日 午前10時～午後4時

企画展示室の一般利用について

＜展示作品の範囲＞

絵画・彫塑・工芸・デザイン・写真・書等の美術作品

<使用期間>

火曜日から日曜日の6日間（搬入・搬出は月曜日）

<使用申込み>

使用しようとする日の属する月の6か月前から、使用開始日の7日前までに手続きをしてください。

<受付場所>

豊橋市美術博物館1階事務室

<受付時間>

午前8時30分～午後5時（但し、月曜日は除く。）

<交通案内>

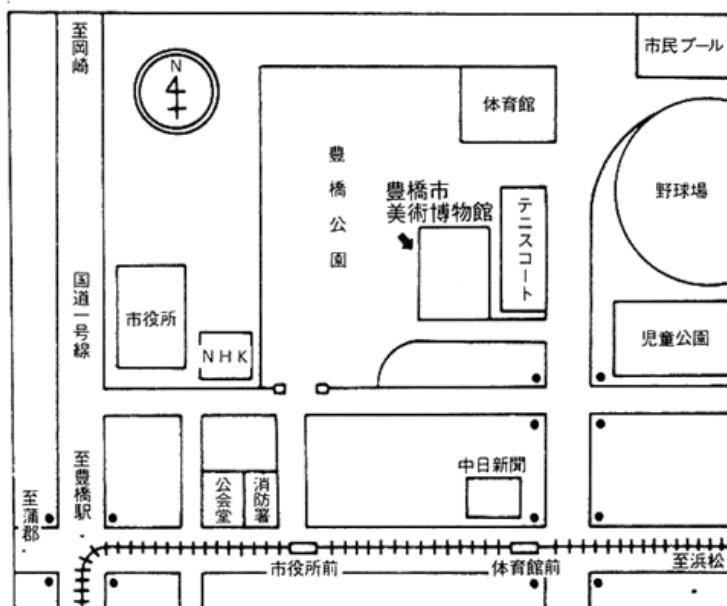
豊橋駅前より市電乗車、市役所前又は体育館前下車、徒歩5分

使 用 料

区 分	单 位	使 用 料
第1企画展示室	1日につき	3,500円
第2企画展示室	1日につき	4,500円
第3企画展示室	1日につき	8,000円
小 会 議 室	午前9時から正午まで	300円
	午後1時から午後5時まで	400円
	午前9時から午後5時まで	700円
パネル	1日1枚につき	100円

[ ]入場料、又は会費の類を徴収する場合の使用料は、当該使用料の倍額とする。

◇案内図



# ナイロビにて

加 納 良 雄

東アフリカの内陸に踏み込み、あちこちにいた部族を西欧の探検隊が、風俗・文化など無視して境界をつくっていったのは19世紀半ば以後のことである。その儘それが国境となっているのがケニヤである。当時支配した西欧の国王が、キリマンジャロ山は私の方へと云われて、それではどうぞと境界線を変えたという話もある。

今のケニヤは民族国家でなく、アフリカ人、インド、パキスタン人、アラビア人、西欧人その他の人々からなる複合社会からなっている。大半のアフリカ人の種別は、バンツー系（サハラ以南に居住するバンツー語系諸部族で、人種的には西アフリカ森林のニグロが起源とされる）、ハミティク系（アラビア方面から南下、北東部乾燥地帯、インド洋岸に居住する）、ナイロティク系（ナイル川沿いに南進、ビクトリア湖沿岸に居住）、ナイロ・ハミティク系（上記二つの混血で、リフトバレーに居住し、マサイ、トルカナ、キプシギス族がこの系統とされる）の4つに大別されるが、バンツー系のキクユ族はケニヤ最大の部族である。またナイロ・ハミティク系にあたるマサイ族は、観光客の間でもよく聽かれる言葉である。そのマサイ族も今世紀に入って、ナイロビー—アルーシャ間に鉄道が敷かれ白人の移住とともに協定が結ばれ、多くがこの区域に住んでいる。北アフリカに源をもつハム族一派で、セム族とともにともとヨーロッパ系の人種である。12000年程前にアフリカへ移ってきたといわれ、時とともにナイルを遡り、700年ぐらい前からケニヤ一帯に住むようになったらしい。エチオピア人や、古くはクレオパトラも同種族であり、肌の色は褐色で鼻筋がとおりすらりとした背は、バンツー系の人々と確きり区別できる。農耕を営むものも僅かにいるが、大半は牛を追って生活する遊牧民である。アフガニスタンやパキスタンで遊牧するパシュトーン族同様、農耕を嫌い、牛の乳に牛の血を混ぜた飲料、牛の糞を利用した家や燃料と文字通りの牛にたよった生活である。サバンナに牛を追うマサイは、観光客に写真をとらせたり、商売をする少数のマサイを除いて、凶暴で排他的な部族である。

この国は1963年に独立したが、それ以前から高度な知識文明が流入したし、複合民族社会ということもあって、民族間の対抗意識がそれぞれに潜在しているようである。東アフリカ随一のナイロビに限らず、ケニヤ各地の主要都市でも商業はインド人社会に握られ、他の人々は使用人的存在でしか見当らない。主要政府機関や、軍事機関はバンツー系部族からなり、武家と商人、金なき権威者と権力なき金持の社会が一部存在しているようである。ともあれ各民族間には潜在的に根強い対抗意識があり、考え方も相違しているので、そうした背景があるのを念頭に東アフリカ諸国の人々と対話の必要がある。指導者層は英國留学の経験者から成っていて、生活態度やマナーはホテルの角々まで英國式で行き渡っている。対日感情はどうだろうか。10年以上の技術協力と、海外観光ブームの余波を受けて年々増加の東アフリカも、彼等の評価はまあまあといった扱いだが、英國基調の生活様式が基盤の彼らが、異質文化と生活様式をややもすると表出する日本人をどのように評価しているかとなると、やや消極的に見た方がよさそうである。しかし物質文明の波を諸に受けている大都市では、自動車を始め、電機、繊維、その他あらゆる日本製にお目にかかる。工業製品の技術評価、指導の面では相当敬意を表しているのではないか。

サファリとはスワヒリ語で旅のことである。狩猟旅行の意味で使っているが、いまでは一般に野生動物の生態をフィルムに収める所謂「カメラサファリ」である。観光客はランドローバーやバスでサバンナを巡り、ゆきとどいた管理の中で、アフリカのスリルを充分に楽しむことが出来る。

バスを降りて草原を歩く場合も、小銃を担った動物監視員がガイドしてくれるので安全である。ナイロビから西方 250 km にアンボセリ国立公園がある。ほぼ一線上に延びた道路は、サバンナの原野を 120 km のスピードで突走る。タンザニアの国境近く、見渡す限り澄んだアフリカの空には時たま綿菓子のように雲が現われている。大空を切って聳える靈峰キリマンジャロは 5895 m の高さ、ドーム型の頂は年中雪に被われている。果てしなく広がるサバンナを疾駆すると、シマウマ、ヌー、ガゼールの群れが草をはんでいる。水境近くをすすむうち車は眼前を横切る巨大なアフリカ象の群れの中に入ってしまった。200頭は下るまい。それでも車と一定の距離を保って象の群れは通りすぎる。威嚇しない限り襲ってくる気配はない。夕暮れどきサファリを終え、ロッジに戻るとアンブレラッリーの枯木を宿り木にハゲコウが眠りにつく。キリマンジャロを背景にシルエットをつくり、南国で観られる星々も輝き始める。アフリカだなと感じるシーンである。ナイロビ市をぬけて北北西に車を走らせると、緑豊かにおおわれていた森林から急きょ車は下降を始める。視界は、遠遠千数百糠に及ぶウガンダ国境を越えて続くグレート、リフト、バレー (great lift valley) に入る。赤道直下の大サバンナで、広がる草原のあちこちにはマサイ族の焚火だろうか、のろしのように微かに煙が上っている。この遠大な光景はアフリカならではの眺めで、大陸を感じた二つ目の視野である。大陸を縦断している大地溝帯はナイロビの近郊を走っていて、地表がガクンと落ち込んでいる。その帶はモザンビークからヨルダンまで達しているという。岸淵の上からの景観が素晴らしく、サハアリロードが真直ぐ延びて地平線に消えている。「ナイロビ」とはマサイの言葉で、「冷たい水」の意味であるが、赤道直下海拔 1700 m の高原都市である。モンバサとウガンダを結ぶ鉄道建設の基地として開けたこの街は、スッポリと森林に被われた中を造成してつくられたオアシス的近代都市で、南国特有の年中花が咲く美しい街である。サハアリ基地として国際色が溢れ、白人に混って日本人もパラパラお会いする。ケニアッタ街、キマチ通り、バザール通りが商店街、市の中央にある Municipal-Market は市民の市場として、旅行者も利用し、興味ある所である。

自然公園の中を野生動物を追ってドライブするサハアリは、ケニヤの代表的なスポーツである。柵の中に入っている動物を観察するのが我々の動物園だが、この地では人間が自動車という柵の中に入って、広大なアフリカの中を移動し観察するため状況が逆になる。国立公園内では一人歩きは出来ない。数多い公園や動物保護区があるが、外から来た者からみれば都市や町を除く全域が自然動物園といった感じである。空港とナイロビ間でさえキリンやガゼルにめぐり会う。野生動物の乱獲を防ぎ、大自然の姿をのこすために徹底した政策が採られていて、一時は街にはんらんしていた毛皮も姿を消し、密猟する人もだんだんなくなり、動物たちの安住の地として指定地域全土に、その動物たちを見ることが出来る。動物保護地域に建つロッヂは自然を損わず、周囲の環境によく合った個性的な建物がいくつか建っている。この拡大な土地に、文明と野生を切り離し、両立させる政策と事業が行っているのは立派といわねばならない。コマーシャリズムに自然を損なうことがよくある国と比較すれば、鋭い英断といえよう。初めての土地に行くと、その土地の事情も解らずいたずらに時間のロスも多い。効率よく回るためにには行く前からの準備を余程よくしておかないとうまく行かない。当初はタンザニアへ回り、マコンデ彫刻の制作工房や、質の高いといわれる素焼陶器も観たかったが、査証手続が間に合わなかったことや、両国の国情の違いでケニヤからタンザニアへ飛行機が飛んでいず、陸路でしか入れない。日程の都合で今回は割愛した。

<愛知県美術館 企画課長補佐>

# フローラ雑記

磯野英男

フローラは、植物用語で言えば、ある地域に生育している植物の全体をいい、植物相とも言わ  
れ、シダフローラ、菌類フローラというように、用いられるのがふつうである。ところで、私が、こ  
れから書こうとしているのは、ギリシア神話のフローラの事でして、百科事典によると、「中央  
イタリア原産の花と春の女神で、多産豊収をもたらす神として、ローマ時代に尊崇が厚かった。  
クイリナル丘上には女神の神殿があり、4月28日のフローラリア(Floralia)というこの女神の花  
祭りは盛大なものであったと言う。造形上女神は、果実や花を手にして、軽装を翻えして歩行す  
る姿に表現されている。当時描かれたものとして、ローマ市のカラカラ浴場址に発見されたナボ  
リ国立美術館蔵の「ファルネーゼのフローラ」、スタビアの壁画の「花を摘む乙女」にもフロー  
ラの名がつけられている。」となっている。この「花を摘む乙女」は、フレスコ画で、紀元前1世  
紀～紀元1世紀の間に描かれたものらしい。スタビアは、ポンペイの南に位置している所で、こ  
の絵がポンペイ系絵画のうちで、最も日本人に好まれるもの一つとなっているが、絵自体は、  
乙女が左手に花籠を持っていて、後ろ姿で、少しうらかえって、白い花を右手で摘むところを描  
いたもので、ギリシア神話的フローラのイメージは、あまりない。やはりこれは題名どおり「花  
を摘む乙女」であろう。

さて、ギリシア神話のフローラを語ろうとすると、現在イタリアのウフィツィ美術館にあるル  
ネッサンスの巨匠ボッティチェルリの代表作「春」を題材にしなければならない、この絵の主題  
には、いろいろな説があるが、画面右で花を口にくわえて逃げようとしているのが、大地のニン  
フ、クローリスであろう、このクローリスがフローラのこと、フローラをつかまえようとして  
いるのが、西風の神ゼピュロスである。ギリシア神話によれば、ある春の日にクローリスは、ゼ  
ピュロスにさらわれ、2人は結婚し、神は彼女に花を支配する力を与え、蜜と花の種は彼女の  
人間への贈物であると言われている。さて、ここで問題となるのが、クローリスの左で全身花模様  
の衣裳でおおわれ、髪にも花を一杯さしている美しい女神である。この女神を春の女神としている  
人もあり、又クローリスがフローラに変身したのだという人もある。さらに、この女神と中央  
の女神（一般にはキューピッドを連れたヴィーナスと言わわれている。）の腹部の異常なふくらみは、  
何か、生成繁殖の女神のみごもっている姿と言う説もあるが、よく分らない。只ここで少し思  
いきった説を言うと、中央の女神をゼウスの3番目の妻ヘーラーとすると面白いのである。と言う  
のはヘーラーは、フローラからただそれに触れるだけで女をはらませる力のある花を与えられて、  
マールスを産んだのであるから。しかしこの説に少し無理があるので、この絵の左端の若者がマ  
ールスの神ではないかと言う説もあるので、ヘーラーの腹の中にいるマールスが同じ絵の中に現  
われていては、まずいわけである。しかしながらマールスの神は、軍神であるとともに農業牧畜  
の神であり、ローマでは春（3月、マールスから英語のマーチとなった）の祭になっていたので、  
この絵にマールスが出て来ても不思議ではない。

さて、この辺でボッティチェルリの「春」を題材としたフローラ的推察はやめて次に移るとして  
よう。

ギリシア神話的フローラでは、バロックの時代に、ニコラ・プーアン（1594～1665）が「フロ  
ーラの王国」（ドレスデン国立絵画蔵）と言う作品を描いている。この作品は、花冠を載いたフ  
ローラを中心に、頭上では、アポロンが4頭だての馬車に乗っている所の絵である。作者のプー

サンは、イタリアの地に居ながらフランス的性格の濃い絵を描き、その古典主義的な世界が、その後のフランス絵画に影響を及したとも言われる。プーアンは、この絵の他に「花神の勝利」（ルーヴル美術館蔵）という絵でフローラが車座に乗っていて、キューピッドが空からフローラに花を与え、女性や子供が花を拾っている絵も描いている。

16、7世紀になると、チューリップ栽培を中心とした球根栽培がオランダで盛んになり、色々な新種が作られるようになった。そして、きれいで美しい様々な球根植物（アネモネ・ヒヤシンス・水仙等）を中心とした絵が沢山書かれるようになった。特にヤン・ブリューゲル（1568～1625）は、「花のブリューゲル」と呼ばれるほど花の絵が多く、又すぐれていた。花に対する細密な描写は、花を愛する忠実な観察のたまものであると思われる。しかし、私はこれほど花を沢山描いたブリューゲルだが、フローラを描いた絵を知らない…………。

名作「夜警」で知られるオランダの画家レンブラント（1606～1669）は、1634年に、貴族の娘サスキア・ヴァン・オイレンボルヒと結婚した。結婚後レンブラントは、若妻サスキアを歴史的あるいは神話的人物に扮した姿で良く描いた。その中で結婚した年に、「フローラの姿をしたサスキア」（エルミタージュ美術館蔵）を描いている。フローラをテーマにしたのは、ロマンティックなイメージを構成する為だろうと言われ、もう一点フローラの姿をかりたサスキアの作品がロンドンのナショナル・ギャラリーにもある。そしてサスキアを亡くした後、1650年頃、晩年と一緒に過ごした家政婦ヘンドリッキをモデルにして「フローラ」（メトロポリタン美術館蔵）を描いているが、こちらは、手に花を少し持っているが帽子の赤い葉飾りだけで、いかにも肖像画的な感じ。只レンブラントは、1639年にアムステルダムで競売に付されたティッイアーノの「フローラ」（ウフィツィ美術館蔵）を知ってはいただろうと思われるが、…………。

17、8世紀になると、ヨーロッパの女性肖像画は、頭髪を花で飾ったり手に花を持っている絵が多く見受けられるようになる。これは、幾分フローラ的イメージをねらったものと思われ、中部ヨーロッパの市民階級の肖像画家ヨハン・クペッキー（1667～1740）やドイツ・ポーランドの宮廷人気肖像画家アーグム・マニヨキラは、良くこの種の絵を描いた。そして、ロココ時代を代表するフランスの肖像画家ジャン・マルク・ナティエ（1685～1766）は、上流社会の淑女たちを女神に変装させて描くの得意とした。その描いた女性像には、髪を少しだが花で飾っている絵が多い。サンパウロ美術館蔵の「フランスの王女たち」は、4人の姫をモデルとして、地・火・風・水という宇宙を構成する。“四大”4点の連作であるが、それらの姫の髪には4点とも花がさしてある。この「フランスの王女たち」の火にあたるアンリエット姫を又、モデルにして「フローラに扮したアンリエット姫」をナティエは描いている。

この時代に、フローラを描いた絵は多いのではないかと思われるが、私の勉強不足か、意外と見当たら無い。もっとも後世に伝わるのは、有名な人の作品ばかりなので、名も知らない人が描いた作品は、伝わらない事もあるけれど、しかしこの時代フローラの最高傑作と私が思う。アレッサン德拉・ロスラン（1718～1793）の「花の女神」（ボルドー美術館蔵）が描かれたのである。絵は画面右上のタチアオイの花から、忘れな草・キンポウゲ類の花・カーネーション・バラ・水仙という順序で、画面左下まで花が流れるように構図され、フローラが、金髪の髪に花冠を載き、右乳房を露出して、ほのかな笑みを浮べた姿は、まさにギリシア神話のフローラそのものと思われる。ロスランは、スエーデン人だが、パリに安住したフランスの画家で、カトリーヌ二世や王公たちの画家であった。一般にフランス人は、花好きで他の家を訪ねるのに、花束を持って行くという習慣もある位なので、フローラが題材として描かれたのはフランスに多い。

絵を離れて、フローラを題材にした彫刻作品を4、5点写真で見た記憶があるが、仲々思い出せない。1点ジャン・バティスト・カルポー（1827～1875）が、1873年にルーブル宮殿の「花の女神の館」という破風彫刻で「花の女神」を主題にして、乱れ咲く花々と幼児たち、そして中央

にひざをついた若い女性の肉体の素晴らしさ、生の喜びをすがすがしく現わした彫刻がある。

19世紀に入ってもフローラを題材とした絵はあるが、それらについては別の機会に書いて見ようと思う。只20世紀になると花を題材とした作品は、現代に引き続き多くの作家が好んで描いているが、フローラを題材にした作品は殆んど描かれなくなる。これは、ギリシア神話を題材とした作品が少なくなったのと同じで、様々な絵画運動の影響で段々影の方へ追いやられたのである。しかしながら、ギスギスとした現代において、もう一度おおらかなギリシア神話を題材とした絵が沢山描かれても良いと思う。ロマンチックなフローラを題材とした絵を現代作家の人達に描いてもらいたいと思うのです。

＜愛知県美術館企画課＞



花の女神（フローラ）  
アレッサンドル・ロスラン作

『愛知の博物館 No.26』

発行日 昭和55年3月  
発行者 愛知県博物館協会  
名古屋市東区東桜一丁目12番1号  
愛知県文化会館内 (TEL <052>971-5511)  
編集者 愛知県博物館協会事務局  
印刷所 ニホン美術印刷株式会社